対談：慣性から知性への撤退

山学進行！

ヨース・ジョエル

植木枝盛が大阪から高知に戻って「自由は土佐の山間より」という言葉をしたためてから、すでに140年以上が経った。この表現は、「自由はドイツの森より」、つまり、フランスの思想家ヴォルテールがフランスを後にしてプロシア王の庇護のもとで執筆活動をつづけると宣言した、18世紀半ばの故事に由来するという説もある。植木がヴォルテールを意識していたかは定かでないが、文明や権力の中枢である都会から遠く離れた周辺地域からあたらしい思想を発信し実現していく、23才の植木の自負心が印象的である。

あたらしい方向を示す言葉は、その言葉が発せられた場所と無関係ではない。奈良、島根、高知。周辺と言って間違いない。これらの場所で活躍する人たちの声を拾うことで、7月9日に開かれたトークイベントは、あたらしい時代の生活モデルの模索に貢献した。東京病が流行る日本国を芝居小屋に例えるならば、表舞台での演技に不満を抱いて声をあげる席が舞台から離れていればいるほど、前に座っている客が振り向くのであろう。

もちろん、言葉の内容も重要である。模索された「モデル」がどのようなものかは、まだ定かでない。人口減少による生活基盤の崩壊、集落そのものの消失、若い人の流出。くずれる、消える、流れる。生々しい単語が並ぶ周辺地域の現状。日本の中央で明々と燃え続ける成長信仰の炎は、ここ50年、周辺地域の慢性的な「酸欠」に支えられてきた。同じ構図は地域の中でも再生される。東京への一極集中は問題視されて久しいが、高知だけを見ても、県庁所在地への集中は顕著である。はて、出口はないのか。「知性への撤退」が一つの指標になろう。

従来の仕組みはガタが来ている。そのゆるみは、しかし、新しい試みの余

地を生み出す。たとえば、地域の問題は、県単位で考えても仕方がない。日本国という括りはともあれ、従来の行政区域、従来の予算の分配、従来通りの「活性化」という幻想から脱却して、新しい枠組みで物事をとらえる必要がある。従来の体制を解体して新しい枠組みを打ち立てる――日本の歴史にその前例は、ある。

明治初期の自由民権運動はけっして一枚岩ではなかった。保守的で排他的な側面もあった。ただし、自由民権思想は本質的に前向きなものであった。「士族」や「国策」のような権威に屈服することなく、その数年前なら疑う余地のない区別や差別の撤廃を訴えた。2世紀も前からある区切りや境界を乗り越えて、新しい未来をつくりだしていく力に満ちていた。その力をさらに大きくしたのは、活動家たちが若かったという事情である。既存の世界観にとらわれずに、自由な政治参加と自由な言論活動の実現を夢見た若者たちは、当時の大人たちに「愚か者！」と叱られたかもしれないが、日本国憲法のもとで国策に異論を唱える自由を満喫している我々からみれば、彼らにこそ先見の明があったと断言できる。

さて、「令和初期」の若者たちには、土佐や大和の奥地から、表舞台で大見得を切る古役者たちに声高に野次を飛ばす度胸があるのか。「何々離れ」が目立ち、スマホ依存や一種の消極性を咎められる世代である。それを、高度成長の再来を夢見る大人たちの空威張りに見切りをつけた「諦め」とみるか、SNSや宅配やコンビニが用意している慢性的充溢による「怠惰」とみるか。

希望を捨てるのは、老いた人にしか許されない贅沢である。戦後日本の価値観のなかで、個人に大きな犠牲を強いてきた「体制」（もろもろの制度：経済、マスメディア、教育、家父長的家族観、ジェンダーなど）にエネルギーを注ごうとしないのが、「何々離れ」の本質であると言えないだろうか。ここに、次の時代が求めるパラダイムへの準備を見ることが出来ないのだろうか。

わたしが教える「日本文化論」という科目で触れる数々の著作の共通点は、日本文化の何某の特徴を強調して論じているところである。日本人が自らの文化の総括に余念がなく、これだけの数の「日本論」を生み出したり読んだり

した理由はそれとして興味深いが、ここで特記すべきなのは、令和５年の大学生たちの反応である。つまり、彼らは、20世紀生まれの著者らが熱く語る日本文化のもろもろの特徴の意義と重要性に関しては、概して冷ややかな目で見ている。たとえば、日本論の多くは、「欧米⇔日本」という軸の上で展開されている。アジア諸国の発展あるいはその可能性が、死角に入っている。だが、物心がついたときに中国の国民総生産が日本のそれを上回り、台湾の一人当たり国民総生産が日本のそれを凌ぐ年に入学した大学生の間には、日本近現代を通して醸し出されたアジア蔑視（あるいはその後の軽視・無視）の姿勢があまり見られない。つまり、彼ら彼女らの日本人としての自己認識に大きな（しかも健全といえる）変化が見られる、そのような前兆とみてよいのではないかと思う。

ただし、健全な変化はおのずと起きるものではない。縦社会の弊害（競争、服従、…）に背を向けて、もっとフラットなSNSやネットワークを駆使して自分の納得のいく生活スタイルを探るのは良いが、仕組みそのものを変えるのに一定の方向性と蓄積をめざす意識、まさしく自負心が働かないといけない。頑張る主義ではもはやいけないことは明確であるが、無関心や現実逃避のみでは、ものごとがまったく面白くない方向に動いてしまう。多くの地方選挙での投票率の低下は従来の政党政治や地域のボスたちによる政治運営に対する一種の異議申し立てともいえるが、長期的には、政治的決定プロセスそのものへの無関心は、望ましくない。令和期は、～からの自由が謳歌されつつあるが、～への自由という動きはどこまで実を結ぶだろうか。

従来の線引きからの撤退。課題は山積みである。まずは自然と人間との関係を見直す。次は、人間らしい生活の基準の再整理――満足と渇望、充実と年給、教養と学歴。ネットワークと情報交換がものをいう時代になれば、公と私の関係も、個人と共同体との関係も、都会と田舎の関係も、大きく変わっていくだろう。戦後の成長モデルが破綻しその外側に位置する日本の地域、日本の山々が新しい時代のモデルのゆりかごであった――100年後にはそのように語られる可能性はけっして低くない。